ARARAT COLLECTION
VOL. V

FOREWORD

Hakan Karar カラル ハーカン

21世紀のアンティークに挑む

工業化以前の絨毯は、デザイン、色、堅牢度に優れ、その骨董的価値は美術品として扱われています。工業化による粗悪な量産品で覆われた20世紀が終った今、私たちは「21世紀のアンティーク」と呼ばれる絨毯生産に挑戦しています。

私は、幼いころはドイツで、その後はイスタンブールで暮らし、家業とする絨毯販売を自然に受け入れてきました。親元を巣立ってからのアメリカ生活、日本への移住、自分自身の店舗経営など、住むところや使う言葉は目まぐるしく、変わりました。しかし、中心にはキリムや絨毯などのオリエンタル・ラグがいつもあって、そこからブレることはありませんでした。

商品の仕入れ先は、主にカーペットベルトと呼ばれる絨毯生産地や世界各地で開かれるオークション・ハウスなどでしたが、親譲りの目利きが功を奏して、一期一会の逸品モノを見つけることを楽しんでいた時期もありました。しかし、目をみはるモノは、どれもこれもアンティーク。見つけ出しては、販売し、やがて逸品は掘り尽くされてしまい、ビジネスそのものが成り立たなくなるのでないかと思いはじめました。

一方で、畳文化という、快適で美しい、独創的な日本の住まい環境は洋風化によって、揺らぎはじめています。19世紀のイギリスで、「アーツ・アンド・クラフト運動」を展開したモリスは、「美しいと思わないものを家に置いてはならない」と説きました。日常的に使う物は、機能と同時に美しくなければならないという主張です。

モリスに遅れること約半世紀（1926年）、日本に「用の美」を唱える民芸運動が、柳宗悦、河井寛次郎、濱田庄司などによって始まりました。東京駒場に日本民藝館（1936年）が置かれ、現在に継続しています。民芸とは、民衆的工芸を省略した造語ですが、その後、この運動によって陶芸、織物、染物、木漆工、網組品など、広範な分野の手工芸品が日本中で見直され、やがて「民芸風」という暮らしの形が生まれ、普及しました。

羊を飼う風土のない日本には、もともと、キリムや絨毯はありません。しかし、日本の生活様式が畳から離れて洋風化する中で、美しく、かつ実用的な敷物の普及がますます大切になることは確かです。そして、私たちの新しい絨毯生産は、工業製品ではなく、工業生産に入れ替わる前の形を求めています。変わりつつある日本の生活文化の中に、美しい、本物の敷物を提供したい。これが、販売に止まらず、生産に軸足を移した私たちの仕事に込めた、意思（Will）であり、こころざし（Ambition）です。

Cover illustration

Garden Rug (152cm x 147cm) Design by *William Morris*

William Morris (1834～1896年）は、19世紀の英国で、装飾工芸家、デザイナー、事業家にして詩人、社会主義運動家として活躍した人です。産業革命によって工業化に邁進したイギリスで、手仕事の価値を見出し、実用の中に美しさを求めた「アーツ・アンド・クラフト運動」を担ったことでも知られています。

モリスは、アーティストとして独自の製作をする一方、1861年に「モリス商会」を創設して自身の製品の普及を進めました。その結果、モリスの手になる植物柄のカーテンや壁紙を愛用する人々は、世界中にいます。もちろん、日本にも。

絨毯もまた、モリスの守備範囲にあり、自身で機に向かって製作したことは有名です。彼の絨毯の結び目は、ダブルノットと呼ばれるトルコ結びで、これは、イラン北部タブリーズ出身のトルコ系の人に師事したからといわれています。

Title page

手紡ぎのスピンドルと仕上がった手紡ぎ糸

右ページは、わた状の原毛に撚りをかけて糸にし、それをコマのようにくるくる回して巻き取るためのスピンドルです。トルコでは、コマの形や重さを自分に合ったものにするため、手作りすることが一般的です。生産の現場で作られ、使われた道具はもとより、使う材料、施された文様、飾りは十人十色。同じものはありません。

Oriental Rugs

Our Rug Production

オリエンタルラグ

私たちの絨毯生産

糸染めは重労働

ステンレスでできた特注の染色用釜に水が600リットル。それをガスバーナーで加熱しながら、一度に糸20キロ程度を染めます。色によっては、染めて出して空気に晒してまた染めて、丸一日かかることもあります。色ごとに、決まった手順を踏み、色むらが出ないように、手紡ぎの糸がくっつかないように、休むことなく棒を使って攪拌します。暑いし、重いし、これがなかなかの重労働。この工程は、力のある男の仕事です。私も、トルコの工房で経験を積んでいます。

私たちの仕事は、研究開発から生産、販売、アフターケアまで

原材料 - Material　私たちは、縦糸も横糸も羊毛を紡いだ糸を使いますが、縦糸を綿糸にする場合もあります。かつては、織端を丈夫にするため、左右の縦糸に馬の尻尾を織り込んだことも。ラクダ、ヤギの毛を使ったものもあります。日本では絹製の絨毯が好まれますが、繊維が弱いので、床置きではなく、壁掛けや家具にかける場合にお勧めします。

染め - Dyeing　1865年に開発された化学染料は、価格や手間の簡単さからすぐに世界に広がりました。日本では植物染め（vegetable dye)は色褪せが早く、発色が弱いとされていますが、絨毯の天然染め（natural dye)は、鉱物や動物資源を多用しているので、何百年も当初の色合いが変わらず残ります。古来からの染色技法や染料を研究し、実践を重ねることで、21世紀のアンティーク製作が可能になりました。

織 - Weaving　機を立て、整形した縦糸を張ってから上に巻き取り、手前を開ける作業を済ませると織に入ります。縦糸を拠り所として、横にノット（結び目）を並べて文様を織り出しますが、そのために、実物大のサイズにグリッドで模様を落とした型紙を用意し、それを見ながら忠実に再現します。複雑な紋様になると10センチ四方を織り上げるために、数日を要します。数人がかりで完成まで数年かかるというような大物を手がけることもあります。

仕上げ - Finishing　機の上で織り上げ、終わったら縦糸を切って機から全体を下ろして広げます。そこで、織りの間違いを見つけて修復したり、不整形に歪んだフォームを修正し、織始めと織終いを整えるなどした後、洗います。完成品への最終ステップですが、この作業がそのまま、既存品の修理や洗濯作業のプロセスとなります。

地域社会に直結 - Social Development　農村集落に潜在する織りの経験者を見つけ出して、仕事場を提供し、同時にそこで新しい働き手を育成します。トルコの農村・農家も日本と同じように多就業化しています。農村の持続性を支えるマンパワーの育成、それによる地域の持続性SDGs(Sustainable Development Goals)を目指しています。

流通 - Marketing　いいものを作ることは簡単ではありません。。ものづくりが成功しても、それを継続させることはさらに困難です。私たちのような工業化に抗う挑戦は、これまでにいくつもありましたが、継続の面で厳しい試練を受けました。先例から学ぶことは、需要に追われて生産の規模拡大をしないこと。何より、良いもの価値をわかり、大切な家財として長く慈しんでくださるお客様に出会うことではないかと考えます。そのために、「注文生産」の道を開拓したいと思っています。

修理と洗濯 - Repair & Cleaning　日本では、販売と同時にアフターケアの仕事を承っています。丈夫な毛織物ですが、日常的に使うものなので、犬猫の糞尿やこぼれた食べ物などの汚れを取らなければ、美しさを保つことはできません。汚れの除去はもとより、糸のほつれの修復、洗浄などのアフターケアを、専用の機器を揃え、専門の職人を抱えて、日本国内で対応できるようになっています。

糸染めに水は命

トルコの工房で染めたウールの糸です。模様の型紙に沿って色糸を選び、パイルを結びます。もちろん、自然資源を使った染めですが、ご覧の通り、私たちの染め糸の色調はとても鮮やかで、しかも色褪せることがありません。

私たちの工房は、トルコの東部アナトリア地方の拠点都市マラティア（Malatya）にあります。世界の古代文明発祥地の一つユーフラテス川上流の西にあり、標高は950メートル前後。農業を主産業とした、人口40万人程度の高原都市です。この地に、拠点となる工房を開いた理由は、市の公共水道の水質が格段に良く、そのpH（水素イオン指数）が安定しているからでした。

さらには、工房の建物の上にタンクを置いて、そこに水を貯めて水質を常時チェックし、酸性とアルカリ性を調整します。万全を期すために、水を運ぶパイプもタンクも、水質に影響しない素材を選びます。染色には、使う水の質が決め手です。わずかなpHの変化で、仕上がりの色は微妙に変わります。カンや経験に頼らず、科学に基づく正確さで勝負するところが、21世紀的だと思っています。

色見本は1日にして成らず

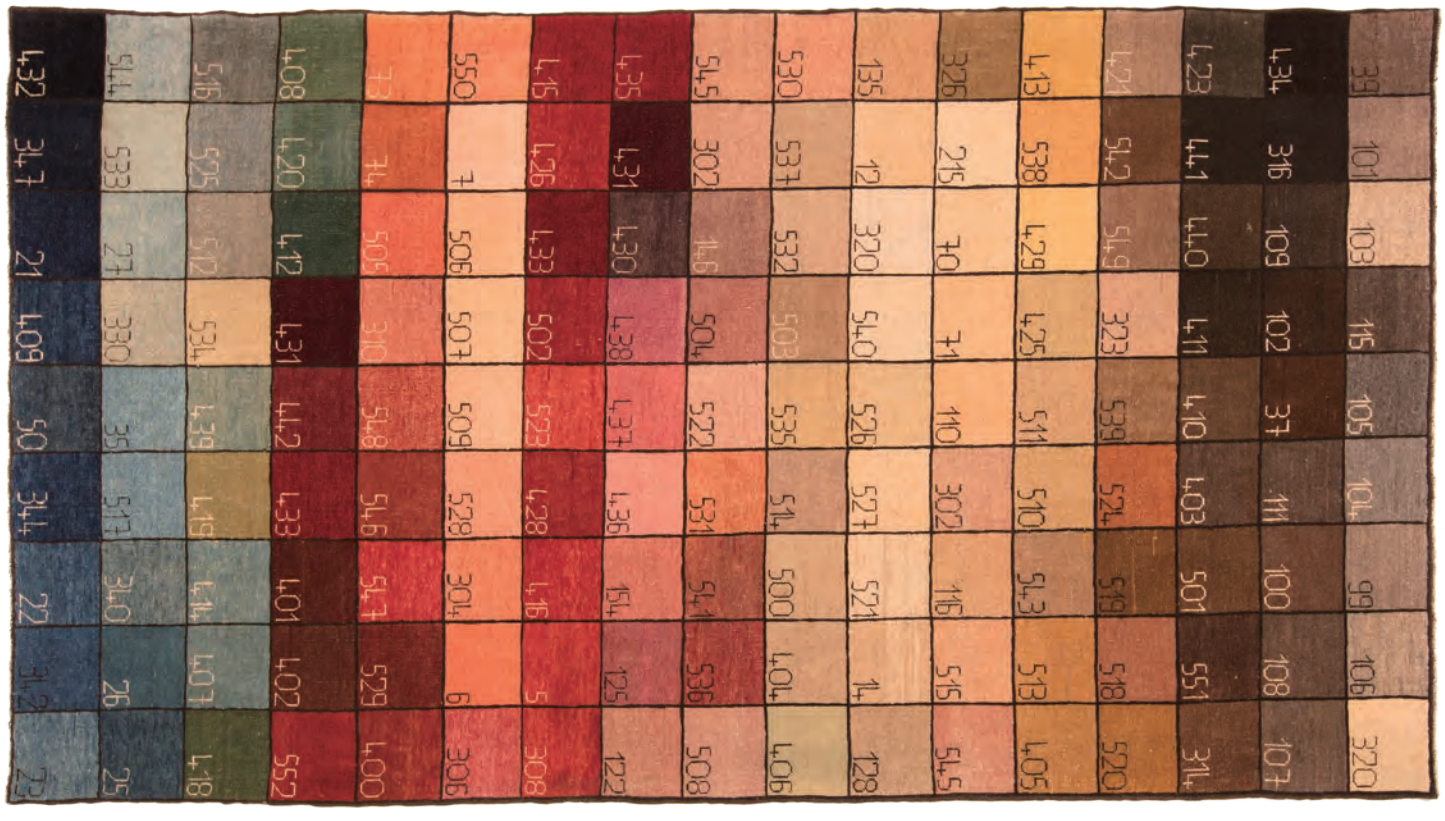
下に掲げた写真は、色見本の絨毯です。番号が付いていますが、それぞれの色ごとに、どのように染めるかの処方が明らかになっています。もちろん、これに限定せず、必要に応じて、色々なバリエーションを染め出す職人がいることは、産地ならではの強味です。この見本によって、色の仕上がりイメージや経年変化がわかります。注文生産をご希望になるお客様とは、この絨毯を挟んでリクエストを伺うことになります。

このように、今では、極めて科学的で実践的な色染めができるようになっていますが、その背景に、二人の研究者とドバック（DOBAG)・プロジェクトがあったと、私は思っています。根幹は、近代トルコを創設したアタチュルクに遡ります。1924年、政教分離と西欧化を柱とした新しい国づくりに取り組む過程で、国外から多様なエキスパートを招聘し、地方の大学や研究機関に派遣しました。明治維新の後、日本政府も同じようなことをやっています。地元の研究者とともに、トルコの自然植物を集め、染めを研究し、成果を書物で残した人として、Dr.Refik Korurの名前を挙げることができます。

もう一人は、『KOEKBOYA - Natural Dyes and Textiles a Colour Journey from Turkey to India and Beyond』を著したドイツ人のDr. Harald Böhmer。トルコからインドにかけて旅して調べ上げた、100種類の植物染めの材料と染め方を紹介しています。この人は、1960年にイスタンブールにあるドイツ系インターナショナル・スクールに、理科の教師として赴任しました。学校から徒歩圏にあるグランバザールで、たくさんの絨毯やキリムに出会い、その色合いや美しさに触発されたのでしょう。化学から究明する研究のスタンスは、処方（formula)として残り、その後の絨毯製作に大きな貢献をしました。

ふたりの研究者が、奇跡としか思えない色染めの解明に立ち上がった時代は、大量生産を目指した工業化が急激に進み、伝統が躊躇なく振り捨てられる時代でした。Dr.Böhmerは、研究の一方で、イスタンブールのマルマラ大学とともに、ドイツの基金を導入して、実践に一歩を踏み出します。これが、DOBAG（ドバック）プロジェクトです。プロジェクトのゴールは、伝統の自然染料を使って製作した絨毯や平織りの敷物を、国際市場に結び、村の女性の経済的安定を図り、村の存続を目指そうとしました。1981年のスタート以降、このプロジェクトは画期的な成功を収め、世界中に製品が行き渡りました。大阪の千里にある国立民族博物館への納品記録も残っています。

現在、活動は目立っていませんが、プロセスで様々な農村振興の政策を提起し、国内外の多くの為政者や研究者やビジネスマンにそのノウハウを伝授しました。私たちが、21世紀のアンティークを作ろうという夢を持つことができたのも、これらの取り組みがなければ叶わなかったでしょう。ローマは一日にして成らず、実は、この色見本の絨毯の背景にも、長い長い時間がかかっています。



村々に織のアトリエを次々と

マラティアの工房では、原材料の調達や保管、デザインや製作のプラニング、縦糸の整形、横糸の染め、村の製作現場への搬入を行います。さらに仕上がった製品の点検、仕上げもここでやります。マラティアの先には、織の現場となる村々のアトリエがあります。当初は東部アナトリアだけでしたが、今は、黒海やエーゲ海方面、社名に由来するアララット山麓のアーダーにも広がりました。延べにして450人程度の人々が、通年働いています。

働き手は、結婚前の若い女性が主力です。アトリエは村の中にあるので、家から歩いて通います。作業をしながら、音楽を聴いたり、おしゃべりをしたり。家業はお父さんが仕切る麦、棉花、酪農、牧畜などの農業。家庭にいる女性が担う、身近な畑の収穫や乳製品などの加工の話に花が咲きます。

女性だけの職場ですから、通常は髪の毛を隠すためのスカーフをしません。私が写真を撮っていたせいで、ふたりがスカーフをしました。トルコ独特の、オヤと呼ばれるスカーフのヘリを飾るレース編みが綺麗です。かぶり方の工夫も素敵。お金もさることながら、働くことの楽しさが、家から若い女性をここに誘い出しています。仕事は単調ですが、「アートなので楽しい」。彼女たちはそう言っています。

アトリエで深まったご近所ネットワークの延長で、集落で共用するパン釜ができたところがあります。特産品開発につながったところも見かけます。自分の力でお金を稼ぐこともできる。イスラムの価値観が根強い農村で、華やぐ女性たちの声に未来を感じます。

1

KURDISH RUG *Shrubs in Lattice*

240 x 421 cm

2

KURDISH SA'UJ BULAGH RUG

196 x 253 cm

3

MAMLUK RUG

205 x 285 cm

4

NORTH WEST PERSIA BID MAJNUM

233 x 369 cm

5

SENNA KURDISH RUG

200 x 307 cm

6

KERMAN PERSIAN RUG *Sickle Leaf*

258 x 363 cm

7

SIX AVATARS RUG

113 x 208 cm

8

KURDISH SA'UJ BULAGH RUG

137 x 211 cm

9

WLLIAM MORRIS DESIGN RUG

140 x 154 cm

10 WLLIAM MORRIS DESIGN RUG

175 x 302 cm

11

AZERI RUG

121 x 173 cm

12 KURDISH GARRUS RUG

147 x 191 cm

13

OTTOMAN MAMLUK RUG

192 x 316 cm

14 MAMLUK RUG

250 x 283 cm

15

BIDJAR RUG

239 x 322 cm

16 CHESSBOARD RUG

186 x 267 cm

新しい玄関マットシリーズ

日本の家庭でまず求められる絨毯は、玄関マットです。そこで、今年は、玄関マットを自社で制作しました。靴を履いたまま家に入る欧米のライフスタイルを基本にした絨毯には、このような小さなサイズは規格外です。日本で好まれそうな色、柄をデザインしてみました。

コロナ禍に揺れる欧米で、屋内へのウィルスの持ち込みリスクを軽減するために、玄関で靴を脱ぐ日本風の暮らし方が見直されています。日本発の新しい絨毯の使い方が世界に広がるチャンスかもしれません。

ARARAT COLLECTION VOL. V
アララット・コレクション Vol. V
by Hakan Karar カラル ハーカン

Organized by

青山キリムハウス

（株式会社アララット・インターナショナル）

〒150-0002
東京都渋谷区渋谷 2-8-3-1F

Tel: 03-5467-2622
E-mail: info@kilimhouse.com
www.kilimhouse.com

AOYAMA KILIM HOUSE

(ARARAT INTERNATIONAL CORPORATION)

8-3-1F, Shibuya 2-Chōme,
Shibuya, Tokyo,
Japan 150-0002

english website:
www.araratrugs.com

© Hakan KARAR, Tokyo, July 2021

Ushak Medalion Rug - Philadelphia Museum of Art

アメリカ東部の拠点都市フィラデルフィアにあるミュージアム。建国百年（1876年）を記念したメモリアルホールを、翌年、美術館に改変。いろいろな分野にわたるアートコレクションは質、量ともにアメリカ有数。専門スタッフによる絨毯の収集・研究は、ニューヨークのメトロポリタン美術館に並びます。